「世に問う」姿勢

山本　博之

それぞれに新たな年をお迎えのことと思います．昨年は皆さまにとりどのような年でしたでしょうか．素晴らしい成果を上げられた方，なかなか思うようでなかった方……　様々と思いますが，本年がより良い年となりますことを心よりお祈り申し上げます．

ある程度シニアの方の中には昨今の社会情勢が昔に比べて「窮屈」になったとお感じになられることも少なからずあると思います．「昔はよかった」などと昔日への想いを述べるつもりはなく，今のほうがよいことも多々あるように思いますが，それでも「大らかでない」，「不寛容」などの言葉が現状を表しているのは，諸々の意見を簡単に並存させるほどの余裕が世の中にないことを示しているように感じます．

現在，学会では「日本分析化学会未来戦略構想（JSAC2024）」として社会に望まれる方向性や対応すべき課題について検討しています．同時にこの仕事を通して困難な現状や多くの意見を目の当たりにし，その策定が容易ではないことに改めて気づかされます．そうした状況の中にあっても私たちの未来を描き，考えを少しでも実現させるには，学会から広く社会に向け私たちの活動内容とともに分析の必要性，重要性を訴え続け，理解を求めていくこと，いわば「世に問う」姿勢が必要であると考えます．会員である私たちは「分析」は社会で何らかの重要な意義をもつと考えていますが，学会外に出れば必ずしも私たちの考えが通用するとは限りません．「世に問う」ことによって当然ながら好意的な理解だけでなく，批判的な意見や反論にさらされることも少なくないでしょうし，そもそも広報が行き届かず「知らない」という方々も多いものと思います．しかしながら，その現実に出会うことは私たちの考えがさらに広く受け入れられることへの一歩となるのではないでしょうか．「異なる考えの並存」が難しくなりつつある現状を十分理解しつつも，「分析」のもつ意義を社会に説いてゆくことは欠かせないと思います．

翻って自らについてどれほど他のコミュニティについて知っているか，と問われるとおよそ心もとないところがあります．この立場になってようやく，他学会の活動状況等についていくばくかの情報を得てきたとはいえ，一般の方々が「分析」にどのような印象をもたれているかなどは手探りで掴（つか）むしかありません．そうであればこそ，学会から私たちの姿勢や活動を「世に問い続け」なくてはと強く感じます．

もちろん，学会の中にも様々な価値観があることは言うまでもありません．学会は基本的に希望者が集う団体ですから，まずは私たち自身が所属する価値がある，意義があると思うことが原点となります．その原点を大切にし，そこから少しずつ外へと広げ，最終的に社会的に認知されるために不断の努力が求められるものと思っています．

〔Yamamoto Hiroyuki，量子科学技術研究開発機構，日本分析化学会会長〕